

吾妻鏡 二十六卷

きのえさる

貞應三年甲申六月小(※陰曆十月)

じようおう

貞應三年(一二二四)六月小十二日 戊寅。

つちのえとら

あめふる

たつのこく

さきのおうしゅう

びようのう

ひごろ

雨下。

辰尅。

前奥州

義時

病惱す。

日者

ごしんしんいあんし

いへど

こと

御心神違乱令むと雖も、又、殊なる事無し。而

このたびすで

ききゅう

およ

よつ

しょうせい

るに今度已に危急に及ぶ。仍て陰陽師を招請

字倍の

くにもち

ともすけ

ちかもと

ただなり

やすさだらなり

ほくせい

す。國道、

知輔、

親職、

忠業、

泰貞等也。

卜筮

大に

はあり

せん

でし

に

有り。

大事有る不可。

如果

かな

に

午後8時、元氣

よくはでくる。

戊尅。

げんき

ぞくせし

べ

のよし

減氣に

属令め給ふ可き之由、

一同占い申

す。然

ながら

しきよう

御祈祷を始行す。

念のため。

てんちさいへんさいふたぎ
天地災變祭二座
〔國道〕。忠業。三万六千神祭

ともすけ ぞくしようさい くにみち
〔知輔〕。属星祭 〔國道〕。如法泰山府君祭

ちかもと
〔親職〕。

こ まつりそなえものら こと によほうのぎのうえ さつ
此の祭具物等、殊に如法儀之上に刷す。十二

なり ちようほう 法目下
種の重寶。五種の身代 〔馬牛男女装束等〕

なり 〔と〕と 全て用いた
也。悉く其の沙汰有り。

こ ほか たいさんふくん てんそうちふさいら ずうざなり これ
此外、泰山府君、天曹地府祭等數座也。是

こんし ぞん のひとめんめん しゅうせし ところなり
懇志を存ずる之人面々に修令む所也。

ただ したが ややききゅう うんぬん
但し時の移りに随い弥危急と云々。

じようおう つちのとう
貞應三年(一二二四)六月小十三日己卯。

あめふる
雨降。

念のため心へ記入

作法通りに、新しく改正した。

着物を着た人、数人、形代に。

さきの

びようあすで かくりん

危うきはた9で

のかみ

前奥州の病痾已に獲麟に及ぶ之間、駿河守を

もつ

な

よしを わかぎみ

おんかた

もうされ

以て使いと爲し、此の由於若君の御方に申被

おんきよ

つ

きょうとらのこく

らくしよくせし

る。恩許に就き、今日寅尅、落飭令め給ふ。

早前十時?

みのこく

も

たつぶんか

つい

もつ

ごそつきよ

已尅。〔若しや辰分歟〕遂に以て御卒去〔御年

六十二。日者脚氣之上、霍乱計會すと云々。

義経

さくちようよ

あいづつ

みだ

ほうごう

とな

られ

昨朝自り、相續け弥陀の寶号を唱へ被る。

しゅうえんのこまで

さら

ゆる

たんのりつしぜんちしき

終焉之期迄、更に緩ぎ無し。丹後律師善知識と

な

これ

かん

たてまつ

爲し之を勸じ奉る。

がくばくいん

ねんぶつずうじったんののちじやくめつ

外縛印を結び、念佛數十反之後寂滅す。誠に

これ

じゅんじ

おうじよう

い

べ

か

うんぬん

是、順次の往生と謂ひつ可き歟と云々。

うまのこく

ひきやくを

つか

され

こうしつ

午尅、飛脚於京都へ遣は被る。又、後室も

らくしよく

そうげんぼうりつしぎようゆうかいし

な

うんぬん

落飭す。莊嚴房律師行勇戒師と爲すと云々。

おんきよ

→

〈略〉

今更々いふと
考へよと。

義時之死

泰時

貞應三年（一二三四）六月小廿八日甲午。

武州

はじにいどの おんかた まいられ きのえうま おんはばか

始めて二位殿の御方へ参被る。 觸穢の御憚り

うんぬん そうしゅう ぶしゅう ぐんえい ぐんけん な

無しと云々。 相州、武州軍營の御後見と爲

ぶけ しぎようすべ の むね か おお あ

し、武家の事を執行可き之旨、彼の仰せ有りと

うんぬん しか さきさきそこつたるかのよし さきのだいぜんたいふ

云々。而るに先々楚忽爲歟之由、前大膳大夫

かくあ おお あわされ くりかえしくりかえし 大江

入道覺阿に仰せ合被る。 々々 申して云は

なおちん い べ

く。延びて今日に及ぶ。 猶遅引と謂ひつ可し。

よのあんき ひとのうたが べ ときなり ちじようすべ

世之安危。 人之疑う可き時也。 治定可き

ことは そ さた べ うんぬん

事者、早く其の沙汰有る可しと云々。

義時

前奥州禪室卒去之後、 世上の巷説縦横也。

デマ

辰時

ぶしゆうはおとうとら

ほろ

ため

武州者 弟等を討ち亡ぼさん爲、京都を出で

げこうせし のよし

けんじつ ふうぶんあ

よつ

しろうまさむら

下向令む之由、兼日風聞有るに依て、四郎政村

のへんぶつそう

いがのしきぶじようみつむね

ぬし

がいけ

之邊物念。伊賀式部丞光宗兄弟、政村主の外家

い

もつ

ないないしつけん

いきどお

と謂うを以て、内々執權の事を憤る。

系

の

の

娘

おうしゆうこうしつ

いがのかみともみつむすめ

またむこ

奥州後室

「伊賀守朝光女」

亦聳の宰相

ちゆうじようさねまさきよう

とあ

かんとうしようぐん

しそく

中將實雅卿を擧げ、關東將軍に立て、子息

執權

もつ

ごこうけん

せいはいをみつむね

政村を以て、

御後見を用い、

武家の成敗於光宗

まか

べ

のよし

ひそか

くはだ

すで

兄弟に任す可し之由、

潜に思い企つ。

已に

わだん

いちどうのやかからあ

ときに

こころざし

和談を成す一同之輩等有り。時于人々志を

あいわか

ところ

うんぬん

ぶしゆう

おんかた

あらあ

これ

相分つ所と云々。武州の御方の人々粗ら之を

うかが

つ

いへど

ぶしゆうふじつたるかの

伺い聞き、告げ申すと雖も、武州不實爲歟之

よし

しょう

あえ

きようそうたま

ず

あまつさ

ようじんのほか

由を稱し、敢て驚騒給は不。

剩へ要人之外

盛綱

さんにゆう

べからずのむね

参入す不可之旨

制止を加へ被る之間

平三

さえもんのじよう

びとうのさこんしろうげん

せきのさこんたいふ

郎左衛門尉、尾藤左近將監、關左近大夫

しろうげん

あんどうさえもんのじよう

まんねんうまのじよう

なんじよう

將監、安東左衛門尉、万年右馬允、南條

しちろうらはか

へめげ

はなは

じやくばく

七郎等計り經廻らす。

ただ寂莫と云々。

だいむ